

生涯学習施設は言葉やコミュニケーションに障がいを持つ人と どう向き合うべきか：総説

三谷 雅 純^{1)*}

Reconsideration on persons with language- and/or communication- disorders from viewpoint of lifelong learning: A review

Masazumi MITANI^{1)*}

Abstract

Security against language- and/or communication-disorders has not been regarded as an important element in the lifelong learning facilities in traditional thinking. I reconsider the disorders and clarify how to create easy-to-read materials beyond the type of impairments. As disorders closely related to the facilities, I pick up intellectually challenged, autism, hearing-loss and deafness, low-vision and blind, children- and adult-aphasia, and dementia. AAC (Augmentative and Alternative Communication) is effective for peoples who have language- and/or communication-disorders, but how to represent is challenging in the facilities for the future. Various reports released by IFLA (International Federation of Library Associations and Institutions) about the consideration for peoples with language- and/or communication-disorders are helpful for many readers and also effective in the facilities. Multimedia DAISY (Digital Accessible Information System) is promising in ICT (Information and Communication Technology) and adaptable for various disorders because it represents not only easy-to-read sentences but also visual-stimuli. The ICT is helpful for the disorders, but we must also reconsider the effectiveness of people-based aids. The staffs of lifelong learning facilities should train themselves in caring with the persons with disorders, exchange information with their organizations, and employ persons with disorders.

Keywords: museum, gallery, library, universal-society, literacy, inclusive

はじめに

日本のような市民の識字能力が高い地域では、人の一生は経年的な教育制度と精神的な発達段階によってモデル化できる。すなわち新生児、幼児、(未就学)児童、小学生、中学生、青年、中年、高齢者などである。しかし、このような人生の経時的なモデル化や類型化は、時として生活実態からかけ離れる。人生における変化はコ

ミュニケーション行動や文字リテラシーの発達に大まかに対応するが、一方、障がい児・者ではコミュニケーション行動や文字リテラシーに困難を抱える場合があるからである。たとえば学習障がいや失語症の例である(伊藤元信(編), 1998; 大石敬子(編), 1998など)。

人間が社会生活を送る上で、コミュニケーションはもっとも基本的な行動のひとつである。そのためコミュニケーション障がい者は日常生活にさまざまな不利益をこ

¹⁾ 兵庫県立大学 自然・環境科学研究所 〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6丁目 Institute of Natural and Environmental Sciences, University of Hyogo; Yayoigaoka 6, Sanda, Hyogo, 699-1546 Japan

併任：兵庫県立人と自然の博物館 自然・環境マネジメント研究部 〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6丁目 Division of Nature and Environmental Management, Museum of Nature and Human Activities, Hyogo; Yayoigaoka 6, Sanda, Hyogo, 669-1546 Japan

* E-mail: mitani@hitohaku.jp

うむる。さらに言葉を含むコミュニケーション行動がうまくとれないと、二次的な抑うつ状態になったり(三村, 2002), 脳血管障がい者では認知症になることも多い(武石, 1995; 「認知症予防・支援マニュアル」分担研究班, 2009)。

一方、博物館や美術館、図書館には、ユニバーサル・ミュージアムの実現をめざす動きがある(広瀬, 2007; 2012; 三谷, 2007; 2011b; 2012)。ユニバーサル・ミュージアムとは生涯学習施設にユニバーサル・デザインの理念(付記1にあるユニバーサルデザイン・コンソーシアムのホームページを参照)を取り込んだものである。

従来、生涯学習施設では、ユニバーサル・ミュージアムを「誰にもやさしい博物館」と呼んで改善策を検討してきたが、あげられた課題は視覚障がい者や聴覚障がい者への接遇のあり方、肢体不自由者への通行の保障、外国人や高齢者への接遇や高齢者ボランティアと施設のあり方(日本博物館協会(編), 2005; 2006a; 2006b; 2006c)であった。この対応によって、障がい者や外国人、高齢者は格段に施設が利用しやすくなった。しかしながら、言葉やコミュニケーションそのものを問題にすることは少なく(三谷, 2011a; b; 2012)、現在までの生涯学習施設では見過ごされることが多かった。これは、言葉やコミュニケーションの問題は施設で取り組むべき課題というより、担当者個人の問題と認識されていたからであると思われる(三谷, 2012)。

今日の障がい者を取り巻く情勢は、個人個人にもつ

とも適した教育をインクルーシブな環境(三好, 2009; 文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会, 2012)(付記4にある文部科学省のホームページ: 初等中等教育局特別支援教育課, 2012も参照のこと)で受け、障がい者をはじめ、さまざまな困難を抱える人びとが、ともに社会参加することが当然であるとする認識が育ち始めている(UNESCO, 1994; 2002, 障がい者制度改革推進会議総合福祉部会, 2011, 兵庫県, 2005; 2007)。このことは、どのような人も受け入れることが前提である生涯学習施設では、特に強く意識しておかなければならない。

この総説で取り上げるコミュニケーション障がい

言葉やコミュニケーション行動に「問題がある」人の含む範囲は広い。リテラシーが未完成的な乳幼児や、年齢と共に俊敏さや活力が衰える高齢者は、これから発達していく人間の初期段階であったり、よりよく生活し穏やかな死を向かえるために大切な時期であったりする。また日本語に不慣れな外国人や帰国子女(日本博物館協会(編), 2006c)も言葉やコミュニケーションを流暢に交わすことはできない(野村ほか(編), 2012)。

このような誰にでも見られる過程とは別に、我われの周りには、個人によって異なる理由で言葉やコミュニケーション行動を取りにくい人がいる。さまざまな遺伝的多様性や傷病、あるいは傷病の後遺症で起こる後天的な多様性の内、言葉やコミュニケーション行動に関係した特性を示す人びとである(表1)。「コミュニケーション

表1 この総説で議論するコミュニケーション障がいの範囲

障がいの種類	一般的な説明	参考文献
知的障がい	抽象的な概念の把握が困難で、複雑な話は避ける傾向がある。判断したり、見通しをもった考えが苦手であったり、読み書きや計算が苦手であったりする。半面、音楽的な感覚が豊かである場合がある。	知的障害者、発達障害者、精神障害者に対応したバリアフリー化施策に係る調査研究検討委員会(編)(2009)
自閉症	こだわりが強く、突発的な出来事や予定の変更への対応があったり、時間の感覚がわかりにくかったり、不快と感じる音を聞き流せないなどの人がいる。特異な才能を示す事があり、人によっては絵画などのビジュアル刺激を受け入れやすい。	知的障害者、発達障害者、精神障害者に対応したバリアフリー化施策に係る調査研究検討委員会(編)(2009)
難聴・ろう	乳幼児期に養育者と交わされる聴覚言語の習得に問題が生じる。前言語期のコミュニケーション行動は、養育者との見つけ合いや行動の模倣、注意の喚起など必ずしも聴覚に頼るものではないが、聴覚に頼るものもあるため、コミュニケーション行動の発達が遅れることがある。先天的なあるいは生後まもなく難聴やろうになった子どもや成人では、多数者とは異なった言語体験を持つことがある。	中村(1998), 野村(1980)
盲・弱視	盲と弱視の説明をする。人にとって視覚は重要な感覚であるため、特に盲はなった年齢によって感覚が違ふ。たとえば先天的な盲人にとって空や色は指で触れないために理解が難しい。点字は触れる情報であるが多数者は理解しない。視覚障がい者が多数者と共に理解できる技術にはDAISYがある。	広瀬(2011), 河村(2011), 通商産業省(2000)
子どもの失語症	子どもでも、脳損傷や、脳炎、脳腫瘍、脳出血などの病気によって、成人の場合と同じように失語症になる。しかし、子どもの脳は活発な成長過程にあり、失語の程度や回復のようすも成長の影響を強く受ける。特に言語の聴覚的理解は回復することが多い。	進藤・玉井(1998)
おとなの失語症	事故による脳損傷や、脳炎、脳腫瘍と共に、脳梗塞や脳出血など後遺症として失語症になる。失語症者が自ら学習する時、言葉の意味や、その社会的な意味づけが重要になる。失語症は高次脳機能障がいに含まれるが、高次脳機能障がい者は精神的に疲れやすかったり、集中力がなくなったりする。	山鳥(1996, 2002), 橋本(2007)
認知症	記憶障害を伴った認知機能の障害であり、コミュニケーション行動がとりにくくなる。二次的には心理的な側面や日常生活の上で障がいが生ずる事がある。十分な医療や介護が行われている場合には、穏やかさが維持されることがある。	認知症介護研究・研修東京センター(2011), 「認知症予防・支援マニュアル」分担研究班(2009)

障がい」と総称されるこれらの多様性は社会的に不利益を被ることが多い（たとえば堤，2008；全国失語症友の会連合会，2013）。

ここで言う「コミュニケーション障がい」という言葉には曖昧さが伴う。その理由として、知的発達遅れのような認知能力が遅れている状態と失語症のように脳機能の一部にダメージを受けた状態が混在し、医学的にはさまざまであること、「コミュニケーション行動の欠損」という見かけの症例が強調され、根本的な理解には至っていないこと、さらに近年になって強く認識されるようになった発達障がいや精神障がいと強くリンクしているために、未だ言葉としての定義が完成していないことがあげられる。

コミュニケーション障がい者が受ける日常の困難はさまざまである。印刷物や磁気情報を「聞く」とか「読む」ことが難しい人がいる一方、「話す」ことや非言語的なコミュニケーション行動に障がいが出る人の場合は、対人的な交渉に支障が出る可能性が高い。現実的には、コミュニケーション障がいの種別に応じたきめの細かい対応が、インクルーシブな（UNESCO，1994；三好，2009；文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会，2012）生涯学習施設には必要である。

この総説においては「コミュニケーション障がい」と総称されるものが、具体的にはどのように区分されるかを「第1部 各障がいの特徴と生涯学習施設での対応」において記述する。その上で「第2部 対応策について」で障がいの種別を越えて読みやすい文章やテキストの作り方、表現の仕方を明らかにする。

第1部 各障がいの特徴と生涯学習施設での対応

知的発達の遅れ

知的発達の遅れは、先天性、あるいは出生時に脳に障がいを受け、知的な発達が遅れて、コミュニケーションなどの社会生活に困難が生じる状態である。話の内容が理解できなかったり、自分の考えや気持ちを表現することが難しく、そのためにコミュニケーションを上手にとれないことがある。複雑な話や抽象概念の理解が苦手な人、判断をしたり、見通しをもって考えることが苦手な人、読み書きや計算が苦手な人もいる（知的障害者、発達障害者、精神障害者に対応したバリアフリー化施策に係る調査研究検討委員会（編），2009）。

言語発達に遅れがある人は、子どもであれ、おとなであれ、象徴性の獲得が遅れている場合が多い（小山，1998）。象徴とは木の棒を飛行機と見なして遊んだり、人形を赤ん坊と見なして抱いたりする認識であり、象徴性には、元来、音の羅列である声を記号と見なして意味

を見出すという人間独自の機能がある。象徴性がなければ言語そのものが成立しない。その意味で、象徴性の獲得が遅れている人には、話し言葉や文章をいくら工夫したとしても、コミュニケーションは不完全なものとならざるをえない。また複雑な話や抽象的な概念の理解が苦手であったり、読み書きが苦手であるために、生涯学習施設の展示解説は理解できないことがある。

知的発達に遅れのある人の多くに適しているのは、音楽であると言われている（松川，1989；五十嵐・緒方，2001）。ダウン症や自閉症で知的発達に遅れのある人は音楽に鋭い感性を持ち、言語コミュニケーションの発達が遅れがちであっても、音楽であれば楽しめる（松川，1989；五十嵐・緒方，2001；ひがしの，2009）。緒方（2000；2003）は障がい児教育に音楽を活用した取り組みのデータベースを全国規模でまとめたが、音楽の活用に関する文献の多くは、知的障害養護学校からの報告であった。さらに音楽を通じて集団行動による社会性を身に付けたり、コミュニケーションの技能を上げているとする報告が多く見られた。

五十嵐・緒方（2001）は音楽の特徴として、(a) あらゆる人に受容されやすい。(b) 心理的、生理的、情動面に働きかけやすく、心地よいという感情が引き出しやすい。(c) 構造的で、枠組みがしっかりしている。(d) 繰り返しが多く、慣れた音楽は分かりやすい。(e) 特に打楽器は簡単な操作で音の出るものが多く、手の動きと音の出ることの因果関係がわかりやすいといった点を指摘している。これらは生涯学習施設でも有効である。

知的発達に遅れのある自閉症児・者では、特定の感覚刺激に嫌悪感を示すことがある。たとえば音が聞こえると耳をふさぐといった例（緒方，2000）である。これは自閉症児・者の感覚特異性によるものとされ、機械音や人の話し声に対する嫌悪（山本・楠本，2007）と音楽を好むことは異なる。

展示解説にリズム感のある歌を利用すれば、言葉は理解できなくても、展示の趣旨と関係の深いオノマトペ〔たとえば〈ブーブー〉など〕や「しりとり歌」〔たとえば〈こぶたぬきつねこ〉など〕で学習が可能になるかもしれない。

自閉症

自閉症児・者は脳の働きの一部が多くの人と異なる。こだわりが強く、突発的な出来事や予定の変更、時間の感覚などがわかりにくかったり、不快と感じる音を聞き流せないといった人がいる（知的障害者、発達障害者、精神障害者に対応したバリアフリー化施策に係る調査研究検討委員会（編），2009）。

自閉症児・者ではコミュニケーション行動の不備をいう前に、まず当事者の対人関係や社会関係の乏しさをあ

げておかねばならない。西村(1998)は、自閉症児・者では対人関係に不可欠である行為と感情の対人的な感応性が円滑に作動せず、そのために相互理解や表現能力がうまく働かず、結果として話し言葉と言語の操作能力が乏しくなると述べている。

ただし、すべての自閉症児・者が、発話言語などのコミュニケーション行動をうまくとれないというわけではない。高機能自閉症児では、社会的な対人関係が築けないなどの困難は生涯残る場合があるが、言葉は発達することが普通である。このように自閉症児・者であっても、重い知的遅滞が認められる人から知的な障がいはいは認められない人までがあり、障がいの質と重さにおいて連続体(スペクトラム)をなしている。そのため、近年は自閉症スペクトラム障がい(山本・楠本, 2007)と呼ばれることが多い。

すべての自閉症児・者が視覚情報を好むわけではないが、自閉症児・者の中には、発話言語などの音声シグナルはうまく聞き取れなくても、絵や写真、絵文字、(人が行うか絵などを使うかは別にして)ジェスチャーやサインなどであれば比較的よく理解できる人がいる(グランディン・スカリアノ, 1993; グランディン, 1997)。たとえば西村(1998)は、自閉症児に話し言葉を補う「サインド・スピーチ(signed speech)」(Scheaffer et al., 1980)と呼ぶ動作や文字を使うことによって、言語発達の効果を上げている。また山本・楠本(2007)は、身体的緊張が強すぎて音声や書字、サインを発することが苦手な自閉症児に対しては、絵やシンボル、単語、文字を選ぶことによって成立するように、コミュニケーションの仕方を工夫して指導している。

同様の考え方に従って、コミュニケーション支援ボード(付記2にある明治安田こころの健康財団や交通エコロジー・モビリティ財団のホームページを参照)やコミュニケーション支援絵記号(付記3にある共用品のホームページ「コミュニケーション支援用絵記号デザイン原則(JIS T0103)」)は、自閉症者だけでなく知的発達の遅れや精神障がいのある人とのコミュニケーション手段として有効なことがある(知的障害者、発達障害者、精神障害者に対応したバリアフリー化施策に係る調査研究検討委員会(編), 2009)。

難聴・ろう

母語を身に付ける時、多数者では聞こえが前提となる。聴覚言語によるコミュニケーションを基本とするからである。そのため、まだ話ができない乳児は、健聴であれば周りの人の話し言葉を聞き、発音をまねて自分の発音を修正し、多数者と同様の発音を身に付ける(野村, 1980)。聴覚言語が発現する前の前言語期のコミュニケーション行動は、養育者との見つめ合いや行動の模倣、

注意の喚起など(野村, 1980; 中村, 1998)、必ずしも聴覚に頼るものではないが、聴覚が言語習得にとって重要であることはまちがいない。そのため、難聴やろうの子どもではコミュニケーション行動の発達が遅れることがある。

先天的な、あるいは生後まもなく難聴やろうになった子どもは、多数者とは異なる言語体験を持つことがある。その影響は成人になっても残る。その代表は手話である。手話は発話言語に代わる視覚言語によるコミュニケーション技法であり、難聴やろうの子どもにとっては習得が容易である。木村・市田(2000)は、手話(日本語の手話には日本手話と日本語対应手話が存在する。ここでは日本手話を指す)は一面的に障がい者の言葉と捉えるべきではなく、発話を伴う日本語とは異なる言語であり、手話を「話す」ろう者とは言語的少数者であるとした。事実、国連のUNESCOでも手話(Sign Language)は自然言語として尊重するべきであり、さまざまな発話言語と共にろう者にとっては母語であると認めている(たとえばBall, 2011; UNESCO, 2003)。

ただ一般の生涯学習施設職員では、手話によって自由に会話ができる人はほとんどおらず、いたとしても制度として配置されている例は少ない。その意味では、ろう者や難聴者で手話を第一言語にする人は、筆談か話者の口の形を読み取る口話でしか健聴者とのコミュニケーション手段はないのが現状である。一方補聴器や、内耳がうまく働かない難聴者が使う人工内耳のような補助機器があり、現在では前言語期も含めて幼児の時から多数者に近い言語体験を持つことが可能になっている。

生涯学習施設で特に配慮すべきなのは、中途失聴者や高齢者になって難聴になった人への対応である。これらの当事者は手話や口話法が使えないため、筆談や、講演会などでは話の要約を書き出してOHPなどで表示する要約筆記がなければ参加できない。したがって生涯学習施設では、手話を第一言語とする人と中途失聴者や高齢で難聴になった人とは支援策が異なることを知っておかねばならない。緊急時の避難や館内放送などは、通常、音声でなされるため、補聴器や人工内耳を付けていても音が割れて、内容が十分に伝わらないことがある点には注意が必要であるが、コミュニケーション手段が確保できれば、難聴者やろう者は多数者と同じように学習に取り組むことができる。

盲・弱視

人の受け取る情報は、多くが視覚情報である。ニューロンのつながりを考慮すれば、視覚は脳の中でも大きな部位を占める(たとえばブルームほか, 2004)。そのため、いつ盲になったかで人の感覚は大きく変わる。盲人は指先で触って物の大きさや形、材質などを感じ取るが、指

先で触れない「空（そら）」や「宇宙」、「山脈」や「色」といった感覚はわからないだろう。また、ホタルの光や基本的に触れることが禁じられている絵画なども、それを口で説明してもらえば想像できるが、比較できる概念がないのだから、正確には認識のしようがない。

盲人には点字という書字体系があるが、点字を自由に読み書くことのできる人は、視覚障がい者以外では少ない。各地の点字図書館などで点字翻訳をしている晴眼者ボランティアは少しずつ増えているが、生涯学習施設職員や利用者のお大半は点字リテラシーが身に付いていない。

弱視者の多くは拡大すれば印刷物がわかるのだから、印刷物などの墨字であっても、弱視者に配慮して大きく印刷した物であれば問題はない。しかし、弱視者や盲人が晴眼者と同じように学習できるのが理想である。晴眼者に一般的でない点字を回避し、どの人も同じ条件で学習できる方法として、デジタル技術がさかんに研究されている（たとえば通商産業省、2000）。

テキスト文字が電子化されていれば、さまざまな ICT (Information and Communication Technology: 情報通信技術) が利用可能である。デジタル・オーディオの再生時の速度調節機能はいうに及ばず、画面の拡大機能やデジタル文字から点字を打つ点字ソフトの利用や、デジタル文字の人工音声での再生、いわゆるスクリーンリーダーなどは視覚障がい者が大いに利用できる技術である（広瀬、2011）。

なかでも DAISY (Digital Accessible Information System: デイジー) は、視覚障がい者の学習環境を一変させた。DAISY は盲人や弱視者だけでなく、大きくなってから視力を失ったために点字リテラシーが身に付いていない中途失明者でも利用可能な技術である。DAISY は音声再生用に利用されてきたテープレコーダーに代わる ICT であったが、現在では国際規格として、音声に限らずさまざまな視覚表現が使えるマルチメディア DAISY が開発されている（河村、2011）。そのため晴眼者も含めた万人に利用しやすいものとなっている。これからの視覚障がい者への対応は、晴眼者の読みやすさも考慮したマルチメディア DAISY の開発が主流となるだろう（三谷、2012）。

なお、視覚障がいには多数者より視野が狭い場合や多数者とは色覚が異なる場合、視線を移動する能力が異なる場合など、さまざまな状態が含まれる。生涯学習施設を訪れる人に多いのは色覚が異なる場合だが、色覚が異なる人への対応策は三谷 (2007; 2008) を参照されたい。

子どもの失語症

子どもの失語症は、事故による脳損傷や、脳炎、脳腫瘍、脳出血などの病気によって言語機能が障がいを受け、成人の場合と同じように失語症になったものであ

る。おとなと異なり脳は活発な成長過程にある。そのため失語の程度や回復のようすは成長の影響を強く受けることされる。ただし低学年では学業に影響が出ることが多い（進藤・玉井、1998）。それでも子どもの脳は可塑性に富んでいるため、おとなの失語と同じように発症初期には言葉の理解が悪くても、代替的に言語野と反対側の大脳半球が言語野に代わって働く可能性が高い（山鳥、1998）。そのために言語の聴覚的理解は回復することが多い（進藤・玉井、1998）。

4歳から5歳ごろまでの子ども（萱村、1997）に十分なりテラシーは備わっておらず、抽象的な概念の把握や象徴性も未発達である。この時期までに失語になった子どもの回復過程を観察した研究は、おとなの失語に比べて極端に少なく、生涯学習施設での対応策は、現段階では決めがたい。ただ、おとなと同様に子どもの失語症にも高次脳機能障がい（野口ほか、2005）が知られており、はなはだしい疲れやすさなどは考慮するべきである。ここでは、失語症の子どもにも生涯学習施設での学習支援が必要なことを指摘するにとどめる。

おとなの失語症

事故による脳損傷や、脳炎、脳腫瘍と共に、おとなの場合は脳梗塞や脳出血などの後遺症から失語症になることが多い。子どもに比べると、おとなの脳に成長に伴う変化はあまり見られず、脳には可塑性（川平・田中、1995; 久保田、1996）が認められるものの、大きくはない。そのため、ここでは症状が変わらないものとして議論する。

失語症者にとっては何気なく聞こえてきた場合の意味理解には問題がないのに、意図的に聞こうとした場合は理解できないことがよくある（山鳥、2002）。生涯学習の場で想定されるセミナーや講演では、何気なく聞くというよりも意図的に聞く場合が圧倒的に多い。失語症者が自ら学習する時、言葉の意味やプロソディを含む社会的な意味づけ（山鳥、1996）は、特に重要になる。

子どもの失語症でも指摘したが、生涯学習施設では、失語症を高次脳機能障がいと見る視点が重要である。失語症と呼ぶ症状は大脳レベルで言語機能が崩壊して起こる言葉の障がい（竹内、1998）であり、さまざまな種類があるが、失語症者にとっては言葉が崩壊しているというだけで、理性や認識、記憶は正常に保たれていることが多い。しかし、高次脳機能障がいという面から見ると、極端に疲れやすかったり、集中力が続かなくなったり、行動の抑制がきかなくなったり、物事を自分で決められなかったりする（橋本、2007）。そのために、しばしば認知症と混同されるが、本質的にはまったく別の状態である。したがって失語症がどれほど重度であっても、してほしくないことや、してもらって嬉しいことの区別

はつく (橋本, 2007). その認識が生涯学習施設職員にないと, 過度に想定年齢の低い学習プログラムを失語症者に提供するといったミス・マッチを引き起こす.

認知症

認知症では, 後天的な病気や事故によっていったん獲得した脳の記憶力が衰えて直前のことが記憶できなくなったり, 「どこで」とか, 「誰が」といった認識がなくなったり, ものごとの手順がわからなくなったりする. 認知症は高齢者に多く見られるが, 若くてなる人もいる (付記 5 にある厚生労働省のホームページ: 若年性認知症の実態等に関する調査結果の概要及び厚生労働省の若年性認知症対策について).

認知症の原因は数多くあるが, 一番多いのはアルツハイマー型認知症である. アルツハイマー型認知症は大脳皮質全体に病変があり, 長期に渡ってゆっくりと進行することが特徴である. 次に多いのが脳血管障がい性の認知症で, 脳梗塞や脳塞栓症を起こした後遺症で起こる. アルツハイマー型認知症が病変は脳全体におよぶが, 脳血管障がい性の認知症は症状の出方がダメージを負った脳の部位によって異なる. たとえば記憶能力は衰えたが計算能力は高いままであるといったことが現実起こる (「認知症予防・支援マニュアル」分担研究班, 2009).

来館者に認知症者がいる場合, 認知症には高齢者が多く, 展示解説やガイドブックの文章表現には, 弱視者とその他のコミュニケーション障がい者に共通する注意が必要である. つまり, 活字を大きくして, 文章は短くし, 空行を入れる (三谷, 2011b), ゴチック体や丸ゴチック体を使うなどの配慮や, 博物館全体の照明あるいは展示解説のスポット照明を明るくすることが必要である.

認知症者への対応策としては, 当事者が生きてきた時代や楽しかった記憶, 趣味, 子ども時代や青年時代, 職業生活や家族の記憶を呼び起こす展示と展示解説が喜ばれる. 郷土の歴史などはその典型である. 認知症者は, 大きく, はっきりとわかりやすい絵や写真を好む. また読み聞かせを好む場合もある (付記 6 にある障害保険福祉研究情報システムのホームページ「認知症の人のための図書館サービスガイドライン」を参照). そういう要求に合う既存の出版物は絵本 (三谷, 2012) や昔のことを記録した写真集などである. 絵本は子ども向けのものでほとんどであるので, 今後は年齢を考慮した作品を作る必要がある.

認知症予防の観点も生涯学習施設の重要な課題である. 認知症を予防したいと思っている人は, 高齢者の4割程度いると言われ (「認知症予防・支援マニュアル」分担研究班, 2009), 認知症予防を目的とした園芸活動や料理のレシピ作り, パソコンによるお知らせ作りなどは, 積極的に社会との接点を作り出す. 園芸活動は季節

にあった草花を植えるスケジュール管理や植物の地域性など, 高度な計画性が要求される (田崎, 2006). また料理のレシピ作りでも, 今日ではかえりみられなくなった郷土料理レシピの記録など, 高齢者でなければできない上, 資料としても価値の高いものがある. 高齢者も社会的に資料価値の高いものを残すことで強い生きがいを覚えるだろう. また生涯学習施設にとっては社会的に価値あるものを保存し, 合わせて健康な高齢者の認知症予防や軽度認知症者の進行を遅らせる効果のある展示と展示解説ができる. 医療機関と連携した地域施設として大きな役目を果たしていると言える.

第2部 対応策について

AAC (補助・代替コミュニケーション)

言葉やコミュニケーション行動に障がいを持つ人は, 多数者と発達が異なるため, 認知のあり方が異なっていたり, 衰えた人であると言える. そのような場合, 言語よりも音楽や絵・写真は汎用性が高い. ただ, 音楽や絵・写真でも物事を抽象的に表すなど高度な精神性は盛り込めるが, 科学系や歴史系の博物館で展示解説を音楽や絵・写真だけで表すことには困難が予想される.

音声言語表出が困難な人に対しては AAC (Augmentative and Alternative Communication: 補助・代替コミュニケーション) と呼ばれる技法がある. AAC では, 身体表現によるサイン, 図形シンボル, 絵と写真やそれをカードにして持ち運びしやすくした絵カードなどが用いられる. サインド・スピーチ (Scheaffer et al., 1980; 西村, 1998) も AAC のひとつである. この AAC によって, 知的発達の遅れや発達障がいのある子ども (西村, 1998; 黒田ほか, 2002), もやもや病のために片麻痺と言語障害がある子ども (平林, 2003), さらに認知症の高齢者 (平林, 2003) とのコミュニケーション改善に役立てた例がある. 失語症者への適応例は研究段階のものも含めて未だないが, 失語症者の一部からは AAC が理解しやすいという意見があった (三谷, 2011b).

知的発達の遅れや発達障がいのある子どもが通う保育園や幼稚園, 特別支援学校でも AAC を活用している例がある. たとえば掲示や時間予定などを, 言葉で書かずに AAC で表している. 高齢者とのコミュニケーションなど, 生涯学習施設でも有効に活用できる. ただ各年齢にあった AAC の表現方法など, 今後の検討課題は多い.

コミュニケーション障がい者に配慮した文章表現

障がい者を対象にした文章表現法を積極的に提案している組織が IFLA (International Federation of

Library Associations and Institutions: 国際図書館連盟)である。IFLAはヨーロッパを中心に活動し、図書や図書館の障がい者サービスのあり方を探っている。関連した多くのレポートが日本語に翻訳され、障害保険福祉研究情報システムから閲覧できる(野村, 2012; 野村ほか(編), 2012など)。また日本でも公立図書館を中心として情報バリアフリーの考え方が広がり、視覚障がい者を中心に障がい者サービスが試みられている(鈴木ほか, 2009)。

IFLAによる『読みやすい図書のためのIFLA指針(ガイドライン)』(野村ほか(編), 2012)には、配慮の必要な障がい者として、ディスレクシアおよびその他の読みに困難がある人、知的発達遅れた人、ADHD(注意欠損・多動性障がい)・自閉症・アスペルガー症候群・トゥレット症候群などの発達障がい者、さまざまな精神神経障がい者、生まれつき耳が聞こえない人、盲ろう者、失語症者、認知症者といったさまざまな人びとがあがっている。これら多様な人びとを対象に、適した文章表現のあり方を考えるのは、あまりにも複雑な課題であるように思われる。しかし、多様ではあるがそれは医学的な多様さであって、彼らに適した文章表現には共通点が多い(表2)。

絵や写真、ピクトグラムの使用は、多様なコミュニケーション障がい者の理解を助けることがわかっている。これはマルチメディアDAISYの活用に結びつく。抽象的な絵の利用は抽象や象徴の概念把握が苦手な障がい者の理解を妨げるような気がするが、かえって絵から浮かび上がるイメージが理解を助けるとされる。

また文章の内容と共に、行間隔や字の間隔、余白を広

く取ることで、デザインの上からもわかりやすくなることが知られている(三谷, 2008; 2011bも参照のこと)。

ICTが行う援助と人が行う援助

スウェーデンのやさしく読める図書センター所長のブロール・トロンバックは、2008年に行った講演「読みやすさ、わかりやすさに向けたスウェーデンの取り組み」(付記8にある障害保険福祉研究情報システムのホームページ参照)の中で、障がい者と社会的非識字者や新しい移民を合わせた「言葉に不自由を感じている市民」の数を25%と推定した。これはスウェーデンの例であるが、そのような人びとに生涯学習をうながし、学習意欲に応えることは、本来、生涯学習施設の使命である。

日本でも障がい者への情報保障は大きな課題になっている。たとえば総務省では障がい者のICT(Information and Communication Technology: 情報通信技術)による社会参加を積極的に進めている(三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社・高齢者・障害者のICT利活用の評価及び普及に関する調査研究会, 2007; 総務省情報通信政策局情報通信利用促進課, 2007)。同様の取り組みは教育の場にも見られ(たとえば大倉, 2008)、生涯学習においても重要である。

そのような中で、今後の代表的なICTとなることが期待できるマルチメディアDAISYは、さまざまな障がい者に使いやすい文章表現技術(鈴木ほか, 2009; 河村, 2011; 野村, 2012)である。金森ほか(2010)は盲児や弱視児の視覚障がい児だけでなく、学習障がい児や肢体不自由児を対象とした実証を行い、マルチメディアDAISYがどのような障がい児の教育に役立つかを検

表2 『読みやすい図書のためのIFLA指針(ガイドライン)』にあげられた読みやすい図書のための文章表現(野村・ニールセン・トロンバック(編), 2012)。改変の上、再録。

a	具体的に書く。抽象的な言葉を避ける。
b	論理的に書く。論理的なつながりで話が展開していくようにする。
c	明快でシンプルな展開にし、導入部を長くせず、登場人物は多すぎないようにする。
d	象徴的な言葉(隠喩)の使用は控える。そのような言葉は一部の読者の誤解を招く可能性がある。
e	簡潔にする。複数の展開を一つの文にまとめるのは避ける。可能であれば、一つのフレーズを構成している複数の単語は一行に収める。
f	難しい単語は避けつつも、大人向けの威厳のある言葉を使う。なじみのない単語は、文脈からのがかりで説明がつくようにする。
g	複雑な関係は、具体的かつ論理的な方法で説明あるいは記述し、論理的な時系列の枠組みの中で事件が起こるようにする。
h	書き手や描き手に、「読むのが難しい」とはどのようなことなのかを学ぶよう促す。実際の利用者に会わせ、その体験や日常生活について聞くようにする。
i	実際の利用対象者に、あらかじめ読んでもらう。

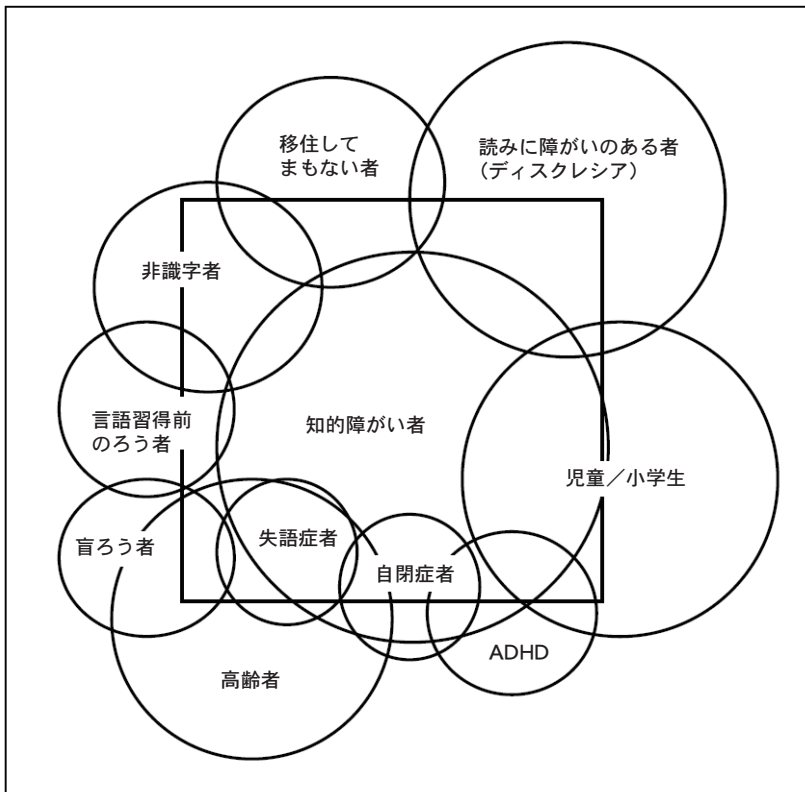


図1 「読みやすい図書」の対象となる人びと。円がだいたいの対象グループを表し、四角形は読みやすい図書のニーズを示している。円に重なりがあるのは、障害が重複していることを示す。この図では障がいのある人と「移住してまもない者」や「非識字者」がいっしょに描かれている。ADHDは注意欠陥多動障がいのことで、日本では発達障がいとして扱われている。付記7にある「読みやすい図書のためのIFLA指針」[トロンバツケ(編)]の図「読みやすい図書の対象グループ」を改変の上、引用。

討している。

一方、DAISYは多くのコミュニケーション障がい者には福音となるが、基本的には紙に印刷した書籍に代わる新しい形式のデジタル出版物であり、読んで理解するには晴眼者が墨字の書籍を理解するのと同等の時間や労力が必要である。これはDAISYに触れるまで文字を読むという習慣がなかった人にとっては、依然として抵抗が大きいことを意味する。また博物館や美術館の展示解説は展示の理解を助けるという意味が大きいため、DAISYで解説を作るにせよ、表現技術は印刷物と同様の工夫が必要である。

トロンバツケは「読みやすさ、わかりやすさに向けたスウェーデンの取り組み」(付記8)の中で、必要とする人びとに読みやすい図書を提供するに当たっては、ICTの工夫と共に、人による積極的な働きかけが必要なことを指摘している。トロンバツケは「朗読代理人」と呼んでいるが、日本でも各地の図書館で盛んになった「読み聞かせを担う人」のことである。知的発達に遅れのある人や重いディスレクシアの人には、本を読む楽しさを教え、刺激を与える格好の手本となる。まだ字を読

めない幼児や認知症の人も、それぞれに合った内容の本を選ぶことで字を読む楽しさを味わい、記憶をよみがえらせることがある(付記6にある障害保険福祉研究情報システムのホームページ「認知症の人のための図書館サービスガイドライン」を参照)。

博物館や美術館では、障がい者のための展示解説を人が説明することで進めているところがある。たとえばアメリカ合衆国の博物館群・教育研究複合体であるスミソニアン博物館では、訓練を受けたボランティアが障がい者に展示解説をしている(視覚障がい者のための展示解説は、付記9にある広瀬浩二郎のブログ「テリヤキ通信」に詳しい)。障がい者の肉体的な条件によっては展示物を鑑賞できない場合があり、それを補おうという試みである。

人と人が接する生涯学習のあり方や援助は、機械が行う援助とは違い、送り手・受け手双方の社会活動に影響を与える。ICTでなければ補助できないことは多いが、人の社会活動の可能性も掴むべきではない。そのために生涯学習施設は、一方で

ICTの導入を目指しつつ、もう一方では人材の育成にも積極的でなければならない。

これから生涯学習施設に求められる制度

この総説にあげたコミュニケーション障がいを正確に理解し、生涯学習施設の業務に生かすことは、多くの職員にとって難しいことであるかもしれない。しかし「障がい」を短所と見るのではなく、社会を構成する人びとの示す多様性として見なし、長所でもあると捉える時、生涯学習施設が内包するさまざまな人びととの共同作業には、大きな可能性がある。たとえば高機能自閉症者の創造的認知能力(グランディン・スカリアノ、1993; グランディン、1997)や、ろう者の視覚刺激を憶える能力の高さ(正高、2006)などは、適切に活用できれば思わぬ成果につながるだろう。

そのような、人の持つ先天的/後天的な多様性を理解するためには、研究者や教職員に対する適切な研修が必要である。それとともに障がい者団体やインクルーシブ教育システム(文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会、2012)に根ざしたさまざまな特別支援学校、

フリースクール、院内学級などとの交流は、今後、生涯学習施設には欠かせないものとなるだろう。これまでの生涯学習施設では人や社会の多様性という視点が駆け落ち、学校団体や展示内容に関連した活動をする市民団体との交流だけを行ってきた。しかし、コミュニケーション障がい者に対応するためには、人や社会の多様性を尊重するという姿勢を忘れてはならない。多様な人が生涯学習施設に関わるのなら、いろいろな展示や展示解説に適切なアドバイスを受けられ、それらの人は有能な共同製作者となるだろう。

それとともに障がいのある研究者や教職員の積極的な採用が必要である。具体的な障がい者の立場や考え方は、障がいの有無や相違によって大きく異なる。それを画一的に捉え、効率よく教育しようとだけする運営態度では、多様な人に対応できない。また障がい者が生涯学習施設職員として働いている施設であれば、さまざまな障がい者、さらにはトロンバッケ（編）（1997）が「読みやすい図書のためのIFLA指針」（図1、付記7）にあげた障がい者以外のさまざまな立場の人びとが施設を訪れる動機は、格段に高くなる。

謝 辞

研究のさまざまな段階でお世話になった西之原郁子さん、中西祥子さん、長谷川康子さん、園田尚美さん、八島三男さん、竹中幸子さん、安居道子さん、安居和輝さん、広瀬浩二郎さん、武田直子さん、宮前周司さん、山家健盛さん、鈴木久代さん、和泉邦夫さん、広谷浩子さん、奥野花代子さん、隅野光代さん、南 恵美子さん、佐藤順子さん、東 ゆかりさん、美馬恵司さん、後藤道代さんと、ここに名前を挙げられなかった全ての皆さんに心から感謝する。本研究は日本学術振興会 平成25～27年度 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）「DAISYを応用したコミュニケーション障がい者にもわかりやすい展示解説技術の開発」（課題番号25350404、代表者三谷雅純）から研究費の援助を受けた。またこの研究に伴って全国科学博物館振興財団 全国科学博物館活動等助成事業（平成25年度）（兵庫県立人と自然の博物館、「コミュニケーション障がい者にも理解しやすい展示解説技術の研修」、三谷雅純）から事業費の援助を受けた。

要 旨

言葉やコミュニケーションの保障は従来の生涯学習施設では重要視されなかった。ここではコミュニケーション障がいを再考し、障がいの種別を越えて読みやすい文章や表現方法を明らかにする。生涯学習施設に

関係の深い症例として、知的発達の遅れ、自閉症、難聴・ろう、盲・弱視、子どもとおとなの失語症、認知症を取り上げる。音声言語が苦手な人にはAAC（Augmentative and Alternative Communication: 補助・代替コミュニケーション）が有効であるが、生涯学習施設での表現手法は今後の課題である。コミュニケーション障がい者に配慮した文章についてはIFLA（International Federation of Library Associations and Institutions: 国際図書館連盟）のさまざまなレポートが参考になる。IFLAのあげた文章表現技術は生涯学習施設でも有効である。ICT（Information and Communication Technology: 情報通信技術）ではマルチメディアDAISY（Digital Accessible Information System: デイジー）が有望である。文章表示法のわかりやすさだけでなく、視覚情報を取り入れることができるので、障がい者を含む全ての人に対応できる。ICTは障がい者支援に有効だが、生涯学習施設では人が行う援助の有効性も忘れてはならない。生涯学習施設では、職員の研修や各種障がい者団体との交流が必要である。また職員として積極的に障がい者を雇用するべきである。

文 献

- Ball, J. (2011) Enhancing Learning of Children from Diverse Language Backgrounds: Mother Tongue-based Bilingual or Multilingual Education in the Early Years. UNESCO, Paris, 87 p. (2013年7月11日閲覧) [http://unesdoc.unesco.org/images/0021/002122/212270e.pdf]
- ブルーム, F.D.・ネルソン, C.A.・ラツェルソン, A. (2004) 感覚系. 新・脳の探求 上: 脳・神経系の基本地図をたどる. 講談社, 東京, pp. 195-280.
- グランディン, T. (1997) 自閉症の才能開化: 自閉症と天才をつなぐ環. 学習研究社, 東京, 299 p.
- グランディン, T.・スカリアノ, M. (1993) 我, 自閉症に生まれて. 学習研究社, 東京, 270 p.
- 橋本圭司 (2007) 高次脳機能障害: どのように対処するか. PHP 研究所, 東京, 246 p.
- ひがしのようにこ (2009) あぶあぶあからの風: ダウン症・自閉症などの知的障がいをもつ青年たちの楽団&ミュージカル 27年の軌跡. 築地書館, 東京, 190 p.
- 平林あゆ子 (2003) 補助・代替コミュニケーション (AAC) とコミュニケーション障害—どのようにコミュニケーションの世界を広げるのか—. 名古屋女子大学紀要 (人・社) 49, 67-78. (2013年7月9日閲覧) [http://libweb.nagoya-wu.ac.jp/kiyo/kiyo49/kj4906.pdf]
- 広瀬浩二郎 (2007) 企画展「さわる文字, さわる世界」の趣旨をめぐって—“つくる力”と“ひらく心”を育むために—. 国立民族学博物館・広瀬浩二郎 (編) UD ライブラリー だれもが楽しめるユニバーサル・ミュージアム“つくる”と“ひらく”

- の現場から. 読書工房, 東京, pp. 91-108.
- 広瀬浩二郎 (2012) 「手学問」理論の創造—触学・触楽・触愕するフィーリングワーカー. 広瀬浩二郎 (編) 触って楽しむ博物館—ユニバーサル・ミュージアムの可能性. 青弓社, 東京, pp. 92-113.
- 広瀬洋子 (2011) 放送大学における視覚障がい者への支援と課題—ボランティア組織「菜の花の会」12年の軌跡から. 放送大学研究年報 **29**, 89-102. (2013年7月9日閲覧)
[http://lib.ouj.ac.jp/nenpou/no29/29-9.pdf]
- 兵庫県 (2005) ひょうごユニバーサル社会づくり総合指針. 兵庫県, 30 p. (2013年7月9日閲覧)
[http://www.universal-hyogo.jp/contents/outline/shishin.html]
- 兵庫県 (2007) ユニバーサルデザイン対応イベント実践マニュアル～だれもが楽しく参加できるイベントづくり～(平成19年12月改訂版), 兵庫県, 27 p. (2013年7月9日閲覧)
[http://www.universal-hyogo.jp/contents/torikumi/pdf/h19-ud_event_manual.pdf]
- 五十嵐由紀・緒方茂樹 (2001) 知的障害特殊学級における音楽を活用した取り組み: 自閉的傾向を伴う知的障害児の事例を通して. 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要 **3**, 109-123. (2013年7月9日閲覧)
[http://ir.lib.u-ryukyuu.ac.jp/handle/123456789/5076]
- 伊藤元信 (編) (1998) 入門講座/コミュニケーションの障害とその回復 ②成人のコミュニケーション障害. 大修館書店, 東京, 198 p.
- 萱村俊哉 (1997) 発達神経心理学的評価: 学習障害・MBDの診断のために. 多賀出版, 東京, 275 p.
- 金森裕治・山崎愛子・田中直壽・松下幹夫・赤瀬 瞳・平峯厚正 (2010) 特別支援教育におけるマルチメディアデジ教科書の導入・活用に関する実践的研究. 大阪教育大学紀要 第4部門 教育科学 **59**, 65-80. (2013年7月16日閲覧)
[http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/25255/1/KJ4_5901_065.pdf]
- 川平和美・田中信行 (1995) 脳における情報処理と可塑性の神経生理学的背景について. 日本リハビリテーション医学会誌 **32**, 670-678. (2013年7月9日閲覧)
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjrm1964/32/10/32_10_670/_pdf]
- 河村 宏 (2011) デジタル・インクルージョンを支えるDAISYとEPUB. 情報管理 **54**, 305-315. (2012年6月5日閲覧)
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/54/6/54_6_305/_pdf]
- 木村晴美・市田泰弘 (2000) ろう文化宣言—言語的少数者としてのろう者—. 現代思想編集部 (編), ろう文化. 青土社, 東京, pp. 8-17.
- 小山 正 (1998) 知的障害をもつ子どものことば. 笹沼澄子 [監修], 大石敏子 [編] 入門講座/コミュニケーションの障害とその回復 ①子どものコミュニケーション障害, 大修館書店, 東京, pp. 3-34.
- 久保田 競 (1996) 脳の可塑性と機能回復. 日本リハビリテーション医学会誌 **33**, 151-154. (2013年7月17日閲覧)
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjrm1964/33/3/33_3_151/_pdf]
- 黒田未来・東 敦子・津田 望 (2002) 重度知的発達障害児への補助・代替コミュニケーション (AAC) 指導. 特殊教育研究 **39**, 25-32. (2013年7月9日閲覧)
[http://ci.nii.ac.jp/naid/110006785596]
- 正高信男 (2006) ヒトはいかにヒトになったか—ことば・自我・知性の誕生. 岩波書店, 東京, 230 p.
- 松川有美子 (1989) ダウン症青年と音楽—共感的関係をめざして—. 情緒障害教育研究紀要 **8**, 67-70. (2013年7月9日閲覧)
[http://ci.nii.ac.jp/naid/110000411648]
- 三村 将 (2002) 高次脳機能傷害とその問題点—精神科の立場から—. 失語症研究 **22**, 185-193. (2013年7月10日閲覧)
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/apr/22/3/22_3_185/_pdf]
- 三谷雅純 (2007) 博物館テキスト『子ども自然教室』のユニバーサル化の課題. 国立民族学博物館・広瀬浩二郎 (編) UD ライブラリー だれもが楽しめるユニバーサル・ミュージアム“つくる”と“ひらく”の現場から. 45-55. 読書工房, 東京.
- 三谷雅純 (2008) 障害のある子どもたちとの社会教育活動: 障害の種類に応じた野外活動やテキスト作りを中心にして. 人と自然 Humans and Nature **19**, 51-60. (2013年7月10日閲覧)
[http://hitohaku.jp/research_collections/no19pdf/19-6.pdf]
- 三谷雅純 (2011a) ユニバーサル・ミュージアムをめぐって: 文章のくふうはどこまで可能か? 博物館研究 **46** (6), 58.
- 三谷雅純 (2011b) ユニバーサル・ミュージアムで文章はどう書くべきか: コミュニケーション障がい者への対応を中心にした年齢, 発達, 障がいの有無によるギャップ克服の試み. 人と自然 Humans and Nature **22**, 43-51. (2013年7月10日閲覧)
[http://hitohaku.jp/research_collections/no22pdf/HN22_06_43_51.pdf]
- 三谷雅純 (2012) DAISYを使ったコミュニケーション障がい者にもわかりやすい展示解説の試み. 人と自然 Humans and Nature **23**, 61-67. (2013年7月10日閲覧)
[http://www.nat-museum.sanda.hyogo.jp/research_collections/no23pdf/NH23_05_61_67.pdf]
- 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社・高齢者・障害者のICT利活用の評価及び普及に関する調査研究会 (2007) 平成18年度総務省委託調査 高齢者・障害者のICT利活用の評価及び普及に関する調査研究報告書. 総務省, 東京, 59 p. (2013年7月26日閲覧)
[http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/joho_tsusin/b_free/pdf/b_free03_1_1.pdf]
- 三好正彦 (2009) 特別支援教育とインクルーシブ教育の接点の探究—日本におけるインクルーシブ教育定着の可能性. 人間・環境学, **18**, 27-37. (2013年9月12日閲覧)
[http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/109788/1/hes_18_27.pdf]
- 文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会 (2012) 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進 (報告). 文部科学省, 東京, 61 p. (2013年9月16日閲覧)
[http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/_icsFiles/afeldfile/2012/07/24/1323733_8.pdf]

- 中村公枝 (1998) 難聴児のことばの問題. 笹沼澄子 [監修], 大石敬子 [編] 入門講座/コミュニケーションの障害とその回復 ①子どものコミュニケーション障害, 大修館書店, 東京, pp. 65-98.
- 日本博物館協会 (編) (2005) 博物館の望ましい姿シリーズ4 誰にもやさしい博物館づくり事業 バリアフリーのために. 日本博物館協会, 東京, 48 p. (2013年7月10日閲覧)
[http://www.mext.go.jp/a_menu/01_1/08052911/_icsFiles/afieldfile/2010/11/08/1298784_01_2.pdf]
- 日本博物館協会 (編) (2006a) 博物館の望ましい姿シリーズ7 誰にもやさしい博物館づくり事業 バリアフリー. 日本博物館協会, 東京, 48 p. (2013年7月10日閲覧)
[http://www.mext.go.jp/a_menu/01_1/08052911/1298788.htm]
- 日本博物館協会 (編) (2006b) 博物館の望ましい姿シリーズ8 誰にもやさしい博物館づくり事業 高齢者対応. 日本博物館協会, 東京, 55 p. (2013年7月10日閲覧)
[http://www.mext.go.jp/a_menu/01_1/08052911/1298822.htm]
- 日本博物館協会 (編) (2006c) 博物館の望ましい姿シリーズ6 誰にもやさしい博物館づくり事業 外国人対応. 日本博物館協会, 東京, 32 p. (2013年7月10日閲覧)
[http://www.mext.go.jp/a_menu/01_1/08052911/1298789.htm]
- 認知症介護研究・研修東京センター (2011) 平成22年度厚生労働省 老人保健健康増進等事業: 地域包括支援センターにおける認知症ケアガイドライン. 認知症介護研究・研修東京センター, 東京, 159 p.
- 「認知症予防・支援マニュアル」分担研究班 (2009) 認知症予防・支援マニュアル (改訂版). 東京都老人総合研究所, 東京, 53 p.
- 西村辨作 (1998) 自閉症児のことばの問題. 笹沼澄子 [監修], 大石敬子 [編] 入門講座/コミュニケーションの障害とその回復 ①子どものコミュニケーション障害, 大修館書店, 東京, pp. 35-64.
- 野口和人・室田義久・郷右近 歩・平野幹雄 (2005) 獲得性脳損傷児・高次脳機能障害児への教育的支援の現状と課題. 特殊教育研究 **43**, 51-60. (2010年1月29日閲覧)
[<http://ci.nii.ac.jp/naid/110006786007>]
- 野村美佐子 (2012) IFLAにおける障害者サービスの取り組み. 野村美佐子・ニールセン, G. S.・トロンバッケ, B. (編) 読みやすい図書のためのIFLA指針 (ガイドライン) 改訂版 (IFLA 専門報告書第120号). (監訳) 日本図書館協会障害者サービス委員会, (訳) 日本障害者リハビリテーション協会, 日本図書館協会, 東京, pp. 55-59.
- 野村美佐子・ニールセン, G. S.・トロンバッケ, B. (編) (2012) 読みやすい図書のためのIFLA指針 (ガイドライン) 改訂版 (IFLA 専門報告書第120号). (監訳) 日本図書館協会障害者サービス委員会, (訳) 日本障害者リハビリテーション協会, 日本図書館協会, 東京, 59 p. (2013年7月19日閲覧)
[<http://www.ifla.org/files/assets/hq/publications/professional-report/120-ja.pdf>]
- 野村庄吾 (1980) ことばの前にことばあり. 乳幼児の世界—こころの発達—. 岩波書店, 東京, pp. 83-100.
- 緒方茂樹 (2000) 障害児教育における音楽を活用した取り組み (I): データベースからみた特殊教育緒学校の現状. 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要 **2**, 61-75. (2013年7月10日閲覧)
[<http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp:8080/handle/123456789/5062>]
- 緒方茂樹 (2003) 障害児教育における音楽を活用した取り組み (II): 教育実践場面における活用を目指したデータベースシステムの構築. 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要 **5**, 77-98. (2013年7月10日閲覧)
[<http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp:8080/handle/123456789/5097>]
- 大石敬子 (編) (1998) 入門講座/コミュニケーションの障害とその回復 ①子どものコミュニケーション障害. 大修館書店, 東京, 224 p.
- 大倉孝昭 (2008) アクティブ字幕を用いた学習環境のユニバーサルデザイン化. メディア教育研究 **5**, 45-54. (2013年7月10日閲覧)
[<http://www.code.ouj.ac.jp/media/pdf5-2-10/No.10-06tokusyuu05.pdf>]
- Scheaffer, B., Musil, A. and Kollinzas, G. (1980) Total communication: A signed speech program for nonverbal children. Reseach Press, 263 p.
- 進藤美津子・玉井ふみ (1998) 子どもの後天性言語障害. 笹沼澄子 [監修], 大石敬子 [編] 入門講座/コミュニケーションの障害とその回復 ①子どものコミュニケーション障害, 大修館書店, 東京, pp. 127-154.
- 総務省情報通信政策局情報通信利用促進課 (2007) 障害者のICTを活用した社会参加事例集. 総務省, 東京, 15 p. (2013年7月26日閲覧)
[http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/joho_tsusin/b_free/pdf/b_free03_2.pdf]
- 鈴木崇文・坂口泰子・藤本昌一・山田 久・田中敦司 (2009) 公共図書館における障害者サービスの動向と現状. 情報の科学と技術 **59**, 403-410. (2013年7月22日閲覧)
[<http://current.ndl.go.jp/node/14022>]
- 障がい者制度改革推進会議総合福祉部会 (2011) 障害者総合福祉法の骨格に関する総合福祉部会の提言—新法の制定を目指して—. 障がい者制度改革推進会議総合福祉部会, 121 p. (2013年4月7日閲覧)
[<http://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoken/sougoufukusi/dl/110905.pdf>]
- 武石 源 (1995) 痴呆とコミュニケーション障害. 竹内愛子・河内一郎 (編) 脳卒中後のコミュニケーション障害, 協同医書出版社, 東京, pp. 109-124.
- 竹内愛子 (1998) 失語症. 笹沼澄子 [監修], 伊藤元信 [編] 入門講座/コミュニケーションの障害とその回復 ②成人のコミュニケーション障害, 大修館書店, 東京, pp. 3-32.
- 田崎史江 (2006) 園芸療法. パイオメカニズム学会誌, **30**, 59-65. (2013年7月9日閲覧)
[www.jstage.jst.go.jp/article/sobim/30/2/30_2_59/_pdf]
- 知的障害者, 発達障害者, 精神障害者に対応したバリアフリー化施策に係る調査研究検討委員会 (編) (2009) 知的障害, 発達障害, 精神障害のある方とのコミュニケーションハンドブック. 国土交通省総合政策局安心生活政策課, 東京, 16 p. (2013年7月9日閲覧)
[<http://www.mlit.go.jp/common/000043355.pdf>]
- 通商産業省 (2000) 障害者・高齢者等情報処理機器アクセシビリテ

- イ 指針の解説. 通商産業省機械情報産業局電子機器課, 東京, 16 p. (2012年6月2日閲覧)
[<http://www.meti.go.jp/kohosys/topics/00000085/kaisetu.pdf>]
- 堤 健造 (2008) 障害者の所得保障と就労支援. 国立国会図書館 ISSUE BRIEF 625. (2013年7月17日閲覧)
[<http://www.ndl.go.jp/jp/data/publication/issue/0625.pdf>]
- UNESCO (1994) The Salamanca statement and framework for action on special needs education. Adopted by the world conference on special needs education: Access and quality. Salamanca, Spain, 7-10 June 1994. UNESCO and Ministry of Education and Science, Spain, xii + 47 p. (2013年7月17日閲覧)
[http://www.unesco.org/education/pdf/SALAMA_E.PDF]
- UNESCO (2002) UNESCO Universal Declaration on Cultural Diversity: Cultural Diversity Series No. 1. (2012年9月12日閲覧)
[<http://unesdoc.unesco.org/images/0012/001271/127162e.pdf>]
- UNESCO (2003) Language vitality and endangerment. UNESCO Intangible Cultural Heritage Unit's Ad Hoc Expert Group on Endangered Languages. UNESCO, Paris, 7 p. (2013年7月10日閲覧)
[<http://www.unesco.org/culture/ich/doc/src/00120-EN.pdf>]
- 山鳥 重 (1996) 言語生成の脳機構. 音声言語医学 **37**, 262-266. (2013年7月9日閲覧)
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjlp1960/37/2/37_2_262/_pdf]
- 山鳥 重 (1998) 第三章 ことばを繰り出す脳: 5大脳半球の左右差と言語機能. ヒトはなぜことばを使えるか. 講談社, 東京, pp. 133-142.
- 山鳥 重 (2002) 川崎医療福祉学会講演: 失語症から見た脳の言語機能. 川崎医療福祉学会ニュース, 181-189. (2013年7月9日閲覧)
[<http://www.kawasaki-m.ac.jp/soc/mw/journal/jp/2002-j12-1/yamadori.pdf>]
- 山本 淳一・楠本 千枝子 (2007) 自閉症スペクトラム障害の発達と支援. 認知科学 **14**, 621-639. (2013年7月9日閲覧)
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jcss/14/4/14_4_621/_pdf]
- 全国失語症友の会連合会 (2013) 「失語症の人の生活のしづらさに関する調査」結果報告書. 全国失語症友の会連合会, 東京, 130 p. (2013年6月4日閲覧)
[<http://www.japc.info/2013-3-25.pdf>]
- 1 ユニバーサルデザイン・コンソーシアムのホームページにある「ユニバーサル・デザインの理念」. (2012年2月22日閲覧)
[<http://www.universal-design.co.jp/aboutus/idea/>]
- 2 コミュニケーション支援ボードの説明は, 公益財団法人明治安田こころの健康財団のホームページ(2013年9月17日閲覧)
[http://www.my-kokoro.jp/kokoro/communication_board/#comb_a] や公益財団法人交通エコロジー・モビリティ財団(バリアフリー推進事業)のホームページ(2013年9月17日閲覧) [http://www.ecomo.or.jp/barrierfree/comboard/comboard_top.html] に詳しい.
- 3 共用品のホームページには, 「コミュニケーション支援用絵記号デザイン原則 (JIS T0103)」の例が載っている. (2013年7月9日閲覧)
[http://www.kyoyohin.org/06_accessible/060100_jis.php#ekigo]
- 4 文科省初等中等教育局特別支援教育課 (2012) のホームページ「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)」. (2013年9月16日閲覧)
[http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/houkoku/1321667.htm]
- 5 厚生労働省 (2009) 若年性認知症の実態等に関する調査結果の概要及び厚生労働省の若年性認知症対策について. (2013年7月9日閲覧)
[<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2009/03/h0319-2.html>]
- 6 「認知症の人のための図書館サービスガイドライン」は, モーテンセン (Helle Arendrup Mortensen) とニールセン (Gyda Skat Nielsen) が 2007 年に国際図書館連盟に提出したレポート "Guidelines for Library Services to Persons with Dementia." (IFLA Professional Reports 104) (ISBN 978-90-77897-22-5) を (財) 日本障害者リハビリテーション協会が翻訳した. 障害保険福祉研究情報システムのホームページで見ることができる. (2013年7月19日閲覧)
[http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/access/info/dementia_iflaprorep104.html] (オリジナルの英文は <http://archive.ifla.org/VII/s9/nd1/Profrep104.pdf>)
- 7 「読みやすい図書のための IFLA 指針」は, ブロール・トロンバック (Bror I. Tronbacke) が 1997 年に編集し, 国際図書館連盟に提出したレポート "Guidelines for Easy-to-Read Materials" を日本障害者リハビリテーション協会情報センター研究情報課が訳し, 日本障害者リハビリテーション協会が 2001 年に発行したものである. 障害保険福祉研究情報システムのホームページで見ることができる. (2013年7月19日閲覧)
[<http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/access/easy/ifla.html>]
- 8 講演会「読みやすい (Easy-To-Read) 図書とマルチメディア DAISY」の中に, ブロール・トロンバックの講演「読みやすさ, わかりやすさに向けたスウェーデンの取り組み」が載っている. (2013年7月19日閲覧)
[http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/access/guideline/080529_seminar_br/or/index.html]
- 9 広瀬浩二郎のブログ「テリヤキ通信」の中の『「ユニバーサル・ミュージアム」って何だろう (1)』にあるスミソニアン博物館の障がい者サービスのようすを見よ. (2013年5月6日閲覧)
[<http://www.minpaku.ac.jp/museum/showcase/fieldnews/staffletter/hirose/teriyaki03>]

(2013年7月30日受付)
(2013年10月25日受理)

付 記